従属的位置付けに置かれた男性当事者へのケア

○杉野衣代（お茶の水女子大学）

1　研究の背景と目的

ケアは、育児、介護、障害などの分野で主題となってきたタームであるが、本研究ではホームレス状態を経験した後に生活保護によってアパート生活を送る単身男性に対するケアを対象としている。この背景には、近年、非営利セクターにより「ハウジングファースト」という手法で脱ホームレス後の男性を生涯にわたってサポートし、アパート生活を持続することを目指す支援が始まっていることがある。なお、「ハウジングファースト」とは、米国で生まれた支援方式であり、ホームレス状態から無条件でまず住まいを確保し、アパート生活開始後本人のニーズに応じた支援を実施する方法である。本研究では、ハウジングファーストで実践されているケアの特徴を、ケアする側ケアされる側双方が持つ男性性に着目して分析することを主な目的とする。

2　調査協力者

・ホームレス状態から生活保護によるアパート暮らしに移行した当事者　５名（男性）
・支援団体スタッフ　２名（男性）

「ハウジングファースト東京プロジェクト」というホームレス支援を行う非営利団体の集合体でのフィールドワークによって得たインタビュー調査結果を利用している。なお、ほとんどの調査データは拙著（杉野2022）掲載のものである。

3　調査結果

当事者は、生活保護によって生活費を賄い、独居で基本的な身の回りのことを自分自身で行う人たちである。これは、自らの労働によって対価を得て、私的領域では女性のケアに依存する覇権的な男性の在り方とは逆であり、従属的な男性性（Subordinated masculinity）という特徴を持っていると言える。インタビュー調査の結果によると、彼らにとって覇権的な男性の在り方、例えば「スーツを着て働く」「サラリーマンやって結婚」などは、参照対象ではあるが彼らが目指す在り方ではない。彼らは、自ら稼いで生活できるようになりたいという意志を持ち、生活保護により生活する現在の自己はあるべき姿ではないと認識しているが、覇権的なポジショニングからは距離をとりたいという意向を持っている。

また、当事者にとって支援者は「相談相手」、「薄く繋がる関係」であり、支援を受けるか受けないかは当事者自らが決めている様子が聞かれた。支援者側からは、「支援被支援の関係をとらない」「問題解決の主体は当事者」といった認識を持つことにより当事者のニーズを引き出すことに成功しているという自負が聞かれた。

4　まとめ

男らしくない自己を見せたくないのは同性である男性であると言われており、「男らしくなさ」をなるべく感じさせないケアの在り方が、支援被支援の関係にならないことや薄く繋がる距離感であるようである。このような関係性の構築が可能となる要因にはハウジングファーストという支援方式があると考えられた。公的制度である自立支援制度は、まず収入を確保した後に最終目標として住まいを手に入れる方式である。この方式では、支援者も被支援者も住まいを手に入れるというゴールに向かって頑張らなければならない。ハウジングファーストでは、支援の初めに住まいを確保するため、その先どうするかは本人の意志や生活保護制度上の就労支援に委ねることができるのである。

杉野衣代（2022）『居住支援の現場から　母子世帯向けシェアハウスとハウジングファースト』晃洋書房。
（キーワード：貧困、単身男性、ハウジングファースト）